外国語活動、外国語科

【小　学　校】

小学校における外国語教育は、中学年で「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達段階に応じて段階的に「読むこと」「書くこと」を加え、教科としての学習を行う。外国語活動・外国語科共に、言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地や基礎となる資質・能力を育成することを目指している。

1　外国語活動の指導の重点

(1)　聞く活動を十分に設定しよう

初めて外国語に触れる第３学年段階では、「話すこと」を早急に求めず、聞く活動を十分に取り入れる必要がある。その上で、まねをして言い慣れる「口慣らし」の段階から、「慣れ親しませる」「活用させる」段階へと無理なく活動のねらいや内容を高めていく。中学年では、「伝え合う力の素地」の育成を目指しており、正確性にこだわるよりも、できるだけ多くの活動を体験させることにより、伝え合う力を養っていく。このように中学年において身近で簡単な事柄について十分に聞いたり、話したりする経験をしておくことが、高学年で更に話題を広げて伝え合う活動につながっていく。

(2)　必然性のある体験的な言語活動を設定しよう

外国語活動においては、「聞くこと」「話すこと〔やり取り〕」「話すこと〔発表〕」の３領域で言語活動が設定されている。外国語を習得していく過程においては、英語の音声に十分触れることと、実際に使ってみることが重要である。言語活動を設定するに当たっては、児童が興味・関心をもつ題材を扱い、聞いたり話したりする必然性のある体験的な活動を設定し、意欲的に活動に取り組めるようにしたい。

(3)　文字については「聞くこと」で扱っていこう

外国語活動では、目標の「聞くこと」に、「文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かるようにする」とある。ここでいう「文字」とは、英語の活字体の大文字と小文字を指し、「読み方」とは、文字の名称（例：Ａは/ei/）を指している。具体的な言語活動としては、「/ei/」と聞いて「Ａ」を指したり「Ａ」のカードを選んだりして、「読み方」と「文字」を一致させていく活動等がある。中学年で英語に初めて触れることから、知識として指導するのではなく、あくまでも活動を通して、体験的に文字に親しませることが重要である。

2　主体的・対話的で深い学びを引き出す外国語活動の学習指導

(1)　「面白そう」「やってみたい」と児童が思う題材を工夫しよう

児童が興味をもち、「面白い」「やってみたい」と思える題材を選定することが児童の主体的な学びを促す。そのためには、児童にとって身近で具体的な話題を取り上げ、自分の考えを伝え合う活動を行うことが大切である。例えば、「Who am I?クイズ」で、児童にとってなじみのある教員やキャラクターを扱ったり、「○×クイズ」で、身近な友達に質問する場を設定したりすること等が考えられる。また、他教科や総合的な学習の時間等との関連を図っていくことで、児童の意欲も高まり、学習に深まりが生まれていく。

(2)　互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動を設定しよう

言語活動とは、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動」である。例えば、小学校外国語活動教材『Let’s Try!１』の「Unit４ I like blue.すきなものをつたえよう」では、単元末に児童が自分の好きなものを友達に伝える言語活動を行う。そこでは、「何を伝えようか」「どんな順番で伝えようか」と情報を整理したり、「何を質問しようか」等、知りたいことを考えたりと児童の「思考力、判断力、表現力等」が活用される。また、相手に伝わるようにゆっくり話したり、ジェスチャーを工夫したりして、外国語のコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせている姿も見られるだろう。さらに、自分と同じ友達の考えに共感したり、相手の知らなかった一面に驚いたりするなど互いの理解を深める機会にもなる。一方、歌やキーワードゲーム等のように、英語を用いているが、考えや気持ちを伝え合う要素がない活動は、言語材料について理解したり、練習したりするための指導であり、言語活動と区別されている。練習の活動は重要であるが、練習だけで終わることがないように留意する必要がある。

(3)　評価を次の学習活動につなげよう（下線部リンクあり）

児童が自己評価できるようなワークシート等を使って、自分の学習を振り返る場を設定することは主体的な学びを生む。その際、「グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方リーフレット＜実践事例編：My English Passport＞」（令和２年12月一部改訂　愛知県教育委員会）を活用する。また、学習評価の方針を事前に児童と共有する場を設け、評価の結果をフィードバックする際にも、どのように評価を行ったかを児童と共有することも大切である。児童が自分の学びを振り返り、「分かる」「できる」を実感しながら、楽しく学び、ステップアップすることを意図して作成されており、各学校の実情等に応じて、内容を変更して活用することができる。さらに、児童の振り返りの記述から学級全体に広げたい考えや新たな疑問を次の時間の導入で伝えたり、教員が見取った児童の達成状況によって活動内容を工夫したりするなど、評価を次の学習活動につなげることが重要である。

なお、評価を行う場面については、指導と評価の計画を作成し、記録に残す場面の精選をする。記録に残さない活動や時間においても、日々の授業の中で児童の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かす。１単元で必ずしも全児童について記録に残す必要はなく、１年間を通して各領域において各観点でバランスよく全児童の記録を残すことが大切である。

個別最適な学びを実現するための授業例（小３　カードをおくろう）

①単元導入では、教師とＡＬＴが欲しい折り紙の形や色を尋ね合い、それらを貼り付けて作ったクリスマスカードをプレゼントするやり取りを見せました。子供たちからは「クリスマスツリーを作りたい」「三角って何て言うのだろう」と、単元で習得したい表現が出され、意欲の高まりを感じました。

カードを贈る相手を決めた後、②これまでの単元の学びの記録を１人１台端末で振り返る時間を設けることで、既習表現を活用して、友達の好きな色や物事をカードに取り入れようという意識が高まりました。児童Ａは、サッカーが好きな友達にサッカーボールを添えたカードを作るために、「五角形」の英語での言い方を知りたいと考えました。１人１台端末でこれまでに学習した図形の名前を確認し、「pentagon」を見つけると、友達に積極的に尋ね、何度も繰り返し練習する姿が見られました。

ここがポイント！

①単元導入時に目指すゴールを明示することで、子供たちが自分に必要な学習を意識することができます。

②スタディ・ログ（学習履歴の記録）を振り返ることで、単元を越えて学びをつなげることができます。

３　外国語科の指導の重点（下線部リンクあり）

(1)　言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成しよう

外国語科においては、「聞くこと」「読むこと」「話すこと〔やり取り〕」「話すこと〔発表〕」「書くこと」５領域で言語活動が設定されている。「聞くこと」「話すこと〔やり取り〕」「話すこと〔発表〕」は、外国語活動において扱われた簡単な語句や基本的な表現等の学習内容を繰り返し使わせる言語活動を設定し、児童が活用できるようにすることが大切である。また、外国語科で身に付ける知識及び技能の「文及び文構造」については、文法の用語や用法を説明して指導するのではなく、言語活動を通して、繰り返し聞いたり話したりする中で理解させるようにしたい。YouTube文部科学省mextchannel の「外国語教育はこう変わる！」にある「言語活動を通して」の具体等や愛知県作成の研修動画を参考に、伝え合う必然性のある体験的な活動を行っていくことが大切である。

(2)　「読むこと」「書くこと」の目標を十分に理解しよう

「読むこと」「書くこと」については、外国語活動では指導していないため、外国語科では慣れ親しませることから指導する必要があり、「聞くこと」「話すこと」と同等の指導を求めるものではないことに留意しなければいけない。

ア　「読むこと」について

外国語科の「読むこと」の目標に、「活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする」とある。「読み方」とは、外国語活動と同様に文字の名称（例：Ａは/ei/）を指している。音については、何度も聞いたり、話したりして音声で十分に慣れ親しんだ語の中で、文字が示す音の読み方、つまり音声と文字を関連付ける指導をする。そのため、中学校のように発音とつづりを関連付けて指導したりするわけではないことに留意する。

イ　「書くこと」について

「書くこと」の活動は教員が想像する以上に時間がかかる場合がある。授業の中で十分な時間を確保し、四線上に正しく書くことができるよう丁寧に指導する必要がある。しかし、単調な繰り返し学習ではなく、何らかの書く目的をもたせたり、ゲーム的要素を取り入れたりするなど、児童の学習意欲を高める工夫をする。

「大文字・小文字」については、児童が何も見ないで自分の力で書くことができるように指導するが、「簡単な語句や基本的な表現」については、音声で十分に慣れ親しんだものを「書き写す」「例の中から言葉を選んで書く」ことができるようにする。つまり、書く活動の前に十分に聞いたり、話したりする活動を設定し、児童が、自分が伝えたいことを書き写したり、選んで書いたりできるよう、例となる語句や表現を示す必要がある。

４　主体的・対話的で深い学びを引き出す外国語科の学習指導（下線部リンクあり）

(1)　Small Talkを通して学習したことを繰り返し使用することで定着を図ろう

Small Talkとは、２時間に１回程度行う帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりする言語活動である。第５学年は指導者の話を聞くことを中心に、第６学年は児童同士ペアで伝え合うことを中心に行う。児童が興味・関心のある身近な話題について、自分の考えや気持ちを楽しみながら伝え合う

中で、教員は児童が既習表現を想起できるように指導・支援を行い、既習表現や対話を続けるための基本的な表現の定着を図っていく。「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（文部科学省）」に掲載されているSmall Talkの指導例(P.84､85)や具体的な活動例(P.130)、YouTube文部科学省mextchannel 「小学校の外国語教育はこう変わる！」②⑦～Small Talkの進め方～等を参考に、「話すこと〔やり取り〕」の言語活動として、継続的に指導していくことが大切である。

(2) 「書く活動」は、単元を通じて、毎時間設定しよう

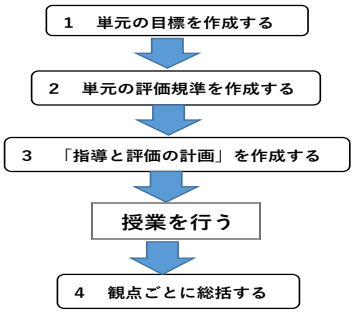
順序性を踏まえて毎時間、書く活動を設定することが大切である。つまり、「聞くこと」で慣れ親しんだ語句を用いて、自分のことをペアで伝え合い、「話すこと」の活動で使った基本的な表現について、音声を聞きながら読み、その後、「書くこと」の活動を行う。その上で、単元を通じて、少しずつ書く時間を設定することで、児童が過度に負担を感じることがないようにしたい。例えば第６学年では、各単元の前半に毎時間学習した表現を使って自分の考えや思いを伝える文を一文ずつ書く活動が設定されている。一文ずつ書きためたものがせりふとなるため、無理なく単元末に友達と伝え合う活動につなげることができる。

(3) 評価を次の学習活動につなげよう

外国語科における評価規準は「内容のまとまり」ごとに示す。外国語科における「内容のまとまり」とは５領域のことであり、「内容のまとまり」の記述が、観点ごとにどのように整理されているかを確認することが大切である。

単元における観点別学習状況の評価は、毎回の授業ではなく、原則として単元や題材等内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場面を精選することが重要である。

【評価の進め方】



（参考資料）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』
令和２年３月　国立教育政策研究所

【5年　誕生日やほしいものを伝え合おう「話すこと〔やり取り〕」の評価場面例】

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1			
2			
3	☆Let's Try ①		
4	☆Let's Try ②	☆Let's Try ②	
5	☆Step 1		
6	★Step 2	☆Step 2	
7	(★ Your Goal)	★ Your Goal	
8			

★記録に残す評価　　☆指導に生かす評価

「指導と評価の計画」を作成する際は、観点別学習状況を記録に残す場面を精選する。記録に残さない活動や時間においても、日々の授業の中で児童の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことが重要である。また、形成的評価とは、原則的に記録に残す評価は行わないが、加点要素がある場合のみ評価するものとし、児童の学習改善をきちんと見取ることで、児童の学習に向かう意欲の高まりへとつなげたい。

個別最適な学びを実現するための授業例（小６　世界の国を紹介しよう）

単元の導入では､教師がモデルとなって世界の国を英語で紹介し、「世界の国を、ＡＬＴや友達が行きたくなるよう、そのよさについて紹介することができる」という単元目標を子供と共有しました。

伝えたい内容をブラッシュアップしていく場面では、①学習方法として、「学習者用デジタル教科書」や「教師の紹介動画」、「教師やＡＬＴ、友達などからアドバイス」等を示しました。他者とやり取りする中で、自分に足りない内容等に気付いた子供は、付け加えたい表現を学習者用デジタル教科書で確認し､繰り返し聞くなど、自分のペースで学習を進める姿が見られました。また、②クラウド上でマッピングを共有することで、アイデアを交換し、学び合う姿が見られました。こうした個別最適な学びの場を充実させることにより、子供は自信をもって英語で発表できるようになりました。

ここがポイント！

①学習手段の選択肢を与えることで、子供が特性や理解度に応じて自分のペースで学習を進めることができます。

②クラウド共有による協働的な学びの場を提供することで、個別の学習が孤立化することなく、より深い理解と表現力の向上につながっています。

【中　学　校】

外国語科では、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考え等を理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目標としている。

その目標を達成するために、外国語の文法規則や語彙等についての知識を十分に身に付けさせるとともに、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる資質・能力を養うことが大切である。

1　外国語科の指導の重点

(1)　聞くこと、読むこと、話すこと、書くことのコミュニケーションを図る資質・能力を養おう

自らの考えを相手に伝えるための表現力を育てるためには、基本的な語彙の習得や正しい英文を書く力、内容的にまとまりのある文章を書く力の育成が必要となる。聞いたり、読んだりして得た知識や内容を、自らの体験や考えと結び付け、話したり、書いたりして発信できる力を育てたい。そのために、「聞くこと」「読むこと」「話すこと〔やり取り〕」「話すこと〔発表〕」「書くこと」の４技能５領域をバランスよく育成し、その４技能を相互に関連付けて活用できるコミュニケーションの場を設定することが大切である。

(2)　文法はコミュニケーションを支えるものと捉えよう

文法は、コミュニケーションを支えるものと捉え、言語活動と一体化して指導したい。文法事項を言語活動の中で繰り返し学習することで、言語材料の定着を図ることが大切である。豊かな内容で円滑にコミュニケーションを図るためには、文法の知識が必要不可欠になる。文法事項を指導する際には、その意味や機能を十分に理解させた上で、それまでに学んだ語彙や文法事項と関連を図るようにする。そして、対話的な言語活動の中で自らの考えや気持ち、我が国の文化や英語の背景にある文化について、学んだ文法事項を生かして伝え合うような場面設定を工夫する。

(3)　小・中学校及び高校の外国語活動・外国語科の実態を把握し、授業計画を組み立てよう

小学校で音声を重視した授業を経験してきたことを生かし、中学校の授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。また、小学校第３学年から第６学年までに扱った簡単な語句や基本的な表現等の学習内容を繰り返し指導し定着を図る。高等学校から中学校に移行した学習内容や、高等学校での学習内容、指導の実態を十分に踏まえて、学年の目標を適切に定め、３年間を通して外国語科の目標の実現を図るようにすることが必要である。

2　主体的・対話的で深い学びを引き出す外国語科の学習指導

(1)　英語をコミュニケーションの手段として用いる場面を多くつくろう

ア　英語を使用する多様な活動を取り入れる

生徒のコミュニケーション能力を高めるには、実際にコミュニケーションをとる体験を何度も積ませることが必要である。言語活動を行う際は、生徒が具体的な場面や状況を把握した上で、それに合った適切な表現を自ら考え、使用することができるように配慮する。また、授業の冒頭に帯活動として「話すこと〔やり取り〕」の言語活動Small Talkを行う。関心のある事柄について即興で情報交換したり、互いの考えや気持ちを伝え合ったりする活動や、自分の考えや気持ち等を整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりする活動を設定し、即興で話す生徒の姿を生み出したい。

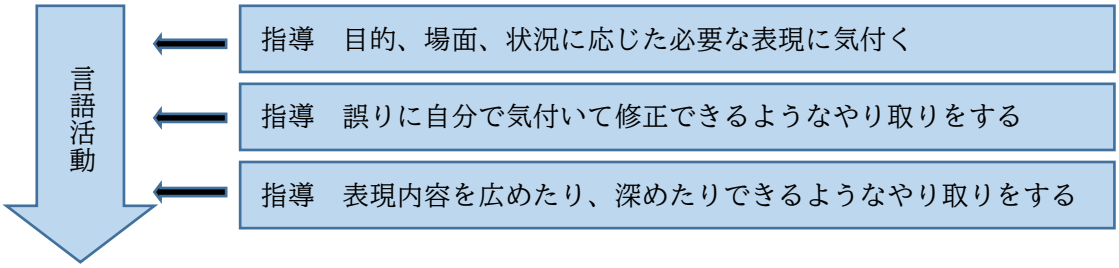
イ　互いの考えや気持ちを伝え合う対話的な言語活動を一層重視する

架空の誰かになりきって何かを表現するだけではなく、自分が本当に考えていることや本当の気持ちを表現する場を設定する。そのためには自身の考えをもち、それを他者に伝える活動を取り入れる。教員自身もコミュニケーションの手段として英語を使用して、自分のことを伝える。

また、言語活動の繰り返しを通じて資質・能力を育成する。「やり取り」「即興性」を意識した言語活動をより充実させるために、「話すこと〔やり取り〕」を、年間を通じて、確実かつ継続的に行う。

【言語活動を通して指導しよう】

教えすぎ、示しすぎを控え、言語活動をしながら、生徒が自分で誤りに気付いたり、新しい表現内容を自ら知りたいと感じたりできるような指導に取り組むことが大切である。



（参考資料）「中学校学習指導要領・学習評価の解説　前編」令和３年５月文部科学省/mextchannel　外国語教育
（下線部リンクあり）

(2)　「ＣＡＮ－ＤＯリスト」形式で学習到達目標を設定し、授業や評価を改善しよう

卒業時に目指す姿としての学習到達目標を達成するために、学年ごとの目標が「CAN－DOリスト」形式で各学校で設定されている。この「CAN－DOリスト」形式で設定した学年ごとの学習到達目標を、各学年年間指導計画にも位置付け、各単元における目標や学習活動、評価方法についても改善する必要がある。単元ごとの評価規準は、内容のまとまりごとに３観点で記述する。観点別の学習状況についての評価は、毎回の授業ではなく原則として単元や題材等の内容や時間のまとまりごとに行う。三つの資質・能力は時間をかけて育まれるものであるため、単元の前半には記録に残す評価は行わず、一定の学習を経たのち、単元終末に行う。

個別最適な学びを実現するための授業例（中２　外国人旅行者に日本の習慣を発信しよう）

「外国人旅行客に、宿での過ごし方や日本で生活するマナー、習慣等を伝えたい。しかし、英語で伝えられず困っている」という地元旅館の女将さんから届いた手紙を単元導入で紹介しました。①子供たちはそれぞれに、入浴の仕方、食事の仕方、交通ルール、挨拶の仕方など、場面や状況をイメージし、テーマを選択しました。学級として、それらを集約したアドバイスシートを女将さんに渡すことで、日本の習慣を外国人旅行者に発信することとしました。

子供たちは、have to や don't have to、mustなどの新出文法に関する知識・技能を身に付けるたびに、自ら設定したテーマに立ち戻り、伝えたい思いをデータ化し、スタディ・ログ（学習履歴の記録）上に蓄積しました。その際、子供は必要に応じて②インターネットで調べたり、友達や教師に分からないことを聞いたり、教師が１人１台端末上で配信した教材を参考にしたりし、それぞれの学習方法でテーマに即した内容及び言語面での適切さをブラッシュアップすることができました。

ここがポイント！

①個々の興味・関心に基づく学習となるよう、単元のねらいに即して各自の追究テーマを設定させることで学習の個性化を図ります。

②一人一人の特性や学習進度、学習到達度に応じた教材及び他者に聞く機会を提供することで、子供が自ら選択・調整できる学習を進めます。